

# 江戸祭礼の芸能

西形節子

はじめに

1. 時代区分と資料
2. 祭礼の概況
3. 祭礼と天保の改革
4. 山王祭附祭の形式
  - (1) 天保の改革
  - (2) 天保の改革以前
5. 練子・芸人の様相
6. 流派の存在および踊指南の状況  
おわりに

はじめに

各地の郷土芸能の調査に比べて、江戸の祭礼の資料および研究はきわめて少ない。

天下祭といわれた山王祭・神田祭は、江戸庶民にとって唯一の楽しみであり、その祭礼にともなう附祭は、当時の庶民芸能の発表の場であった。この附祭の芸能から、江戸時代の歌舞伎と別世界にいた庶民のかくれた舞踊状況を知ることができる。

附祭の芸能に関する資料、番附、唄本などにより、幕末から明治にかけての一般子女の舞踊形態、踊指南の存在や流派の状況を調べてみた。これにより舞踊教授の形態から、日本舞踊各流派の今日への流れをとらえることができると思う。主として、資料の多く得られた山王祭附祭を中心に調査結果を報告する。

なお、山車と書いて「だし」と読む。しかし番附には「出し」で記してある。ここでは、誤解をさけるため、すべて「ダン」に統一した。

## 1. 時代区分と資料

現在のところ、享和二年（1802）の山王祭、元飯田町附祭にはじまり、文久二年（1862）までの資料を募集した。享和二年以降、文化文政期間はまだ見あたらず、この間、附祭の詳細な状況は把握できない。天保三年（1832）から文久二年の30年間を中心として検討する。

資料の内容は、神田祭も含めて、「番附」6冊、「山王祭附祭練子芸人名前帳」2冊、「唄本」76曲である。この内には、年代不明の唄本が3曲ずつ組合せで二種類あり、内容（振付・後見・芸人

の氏名など）から安政年間または文久2年ではなかろうかと思われるが未確認である。これが判明すると、天保13年以降、幕末20年間の山王祭附祭の芸能形態がもつと確実に握れると思う。

山王祭の本祭は子、寅、辰、午、申、戌の年にあたり、神田祭と交互に隔年で行われる。資料からみると、附祭の内容は両者まったく同じである。〈資料A「資料一覧表」〉

## 2. 祭礼の概況

山王祭の巡行（今日では神幸祭とよぶ）には、神旗、神馬、神輿などの神幸行事があり、各町からダンがくり出されるのが特徴である。第一番に大伝馬町の鶏太鼓のダン、第二番に南伝馬町の猿のダンが出る。この形式は神田祭も同じである。そのあとは、思い思いの題材で、翁などの祝儀物、伝説の主人公浦島、乙姫など、各町内から45乃至50のダンがでる。なかでも、武蔵野と称する月にすすきのダンが圧倒的に多いのが、いかにも江戸の祭らしい。

ダンの後に「附祭」ととくに書出しがある場合があって、その演目と内容が記されている。これが附祭と称する祭礼の芸能で、唄・三味線・囃子方を繰りだし、扮装をした踊子たちが、歩きながらまたは台の上で芸能をみせたようである。すべてのダンに付けられるのではなく、ダンだけの町の方が多い。附祭がある町では、芸能をする者のほかに、鉄棒引、警固の人々、担ぎ屋台、底抜け屋台などを荷う人々、その上にこれらの人の弁当を入れたと思われる荷い茶屋まで行列に加わるなど、大変な人数を動員していることがうかがえる。

手許に集めることのできた資料をもとに、附祭と称された芸能の様相を探ってみる。

## 3. 祭礼と天保の改革

資料を概観すると、天保13年（1842）を境に附祭の形態が大きく変わり、その後はある一定の形式を保って行われていることがわかる。

内容の詳細は後述するが、天保5年（1834）の番附では45番のダンの中、18番も附祭があるが、天保13年以降の附祭は3番に減少している。その上に、氏子の町内の数を比較しても縮小されたこ

とがよくわかる。すなわち、天保5年の1回分の附祭の町の数が、天保13年ほか6回分を合計した町の数に匹敵する。しかも天保13年から文久2年の20年間に附祭を再度受持っている町は全くなく、当番がまわってくるのは20年に1度の割合ということになる。これらはあきらかに天保13年の水野忠邦による天保の改革の影響によるものと考えられる。天保7, 9, 11年の3回の資料が見付からず正確は期しがたいが、天保13年以降ほとんど同じ形式に定着していることからみても、天保の改革の取締りのいかに厳しかったが察せられる。

すでに、江戸中期寛政以前に山王祭、神田祭など江戸の祭が次第に華美となり豪奢に財を消費していたことは、徳川幕府が町々に取締の令を発していることであきらかである。寛政3年(1791)4月の町法之内に「山王神田其外共祭礼之儀、是迄差定候番組ノ外<sup>(1)</sup>ねり物万度等一切令停止 附祭りハ惣祭町ニテ大神楽一組外ニ式組都合数三ツと定ル間其旨心得……(後略)」と附祭の数を規定し、衣服類も華美にならぬよう、費用の配分、届出など多くならぬよう細く指示を出している。しかしながら、その後も一向に江戸の祭礼の加熱化はおさまる様子にはなかったようである。練物、引物、地走り踊がきめられた3番のほかにも数多く出されたい。20年すぎた文化8年(1811)にはふたたび奉行所から町々の肝煎に、前の町法改正の趣意を徹底させる布令が出ている。これをみても江戸の人々の祭礼に対する異常なほどの情熱は想像以上のものであったのだ。まさにリオのカーニバルと同じく、1年間働いた金のすべてを祭礼のために費してしまったのではなかるうか。その裏付けとして、「享和2年山王祭礼の元飯田町附祭り書上並図」の後尾に「私云書上者六百人与有之候へ共内々千余人出申候<sup>(2)</sup> 此雑費金三千両程ト里正江塚氏の物語也 杏園…文化丁卯11月栴栳園とあるのをみても、法外な出費であったことは想像にかたくない。

附祭のために動員された人数からも、庶民の熱の入れ方の程がしれる。享和2年の元飯田町の一町で幕府へ書出した数はしめて272人だが、実際にははるかに多かったと伝えている。こころみに、天保改革後の嘉永3年(1850)の人数を大ざっぱに計算してみた。1ブロックの町だけで、芸人の数が約250人から350人、これには踊台、引台、底抜け日覆、荷い茶屋などをかつぐ人足などは入っていない。踊台持人足20人(万延元年の記録より)としても、荷い茶屋は十荷から十五荷もあり、作り物の大道具を扱う人まで計算すると、およそ200人近くは必要となろう。これからみても1ブロックで500人前後の人が動員されている。

天保の改革以後でも、附祭の数は規制されたが、内容の規模は縮小されるどころか、ますます派手

になっている。しかも、この総費用は町々が負担するのである。したがって、附祭の練子、芸人や氏子たちには相応の財力がなければ参加できなかったのは当然のことと考えられる。

注(1) 『日本庶民生活史料集成』第22巻「茉莉花」

179頁

(2) 同上 188頁

(3) 同上 181頁

#### 4. 山王祭附祭の形式

##### (1) 天保の改革前(天保5年の附祭)

天保の改革以前の資料は少ないが、天保5年の附祭番附をもとに考察してみる。

総数45番のダシの内、附祭のあるのは18ブロックの町に及んでいる。その内、踊台が10、練物8で、それぞれが趣向をこらした演目である。この年には地走(後述)は見当らない。<資料 B> 踊台は、屋根のある、いわゆる屋台で、移動には担ぎ人足がかついだようである。番附の絵をみると、はやし方、浄るり、唄、三味線とも、地面の上に立姿で、踊子だけが屋台上で演技をしている様子が画かれている。

演目は「三番叟と千歳」「五郎と舞鶴」「義経と卿の君」「頼政と菖蒲前」「高砂丹前」など、二人立の男女の組合せか、「傀儡師」「矢の根」など一人立の作品である。浄るり・唄の詞章から歌舞伎所作事と同様の舞踊と思われるが、なかに面白いものも2, 3ある。「舌出し三番叟」で踊子が人形つかいとなり人形を遣い、その後見に吉田冠三ほか本職の名があって、絵には黒衣を着た人物がみえる。また、「傀儡師」は清元の地方をつかって踊りながら、手品のように蝶・だるま・など品物を出してみせるということもあったようだ。

踊台の芸能の特徴の一は、引抜きをして、別の演目を踊っていることである。すべての踊台に引抜きがあるわけではない。しかし、引抜きのなかで奇異に思えたのは、「頼政→茶摘女。菖蒲前→茶摘男。」「業平→小原女 小町→仕丁」と立役から女方に、女方は立役に入れ替って引抜いていることだ。演者は女子供で、13歳から15.6歳が圧倒的に多く、18歳となるとごく少ない。2年に1度しか巡ってこない山王祭、その上附祭の踊台を出せるのは氏子町内の中のごく一部に限られ、多分まわり持ちなので、滅多にチャンスに恵れるわけではない。思うに千載一遇の一生に一度の晴れ舞台に、日頃の成果のすべて(立役も女方も)を発表したいというところから、変則の引抜きとなったのではなかるうか。踊台の踊子は附祭のスターであり、稽古娘たちの憧れの的であったのであろう。

この年の番附には、芸人(踊、地方とも)の名

は詳述されているが、振付の名はまったくない。しかし、踊台の演目には全部後見がついている。名不詳もあるが、名前、年齢とも明記しているものもある。なかに、やす53歳、また三津世19歳、扇芝23歳、哥仙など芸名らしく思われる名前もあった。姓がないので確証はないが、年齢や踊子との関連からも、踊師匠ではなからうかと思われる。

練物は、一口にいうと仮装行列のようなものである。しかし単に扮装をして練って歩くというだけでなく、歩きながら芸能もみせたり<sup>キコウ</sup>しい。練物にも、それぞれ主題があり、「玉取の学」「和藤内凱陣の学」「土農工商の学」などと題して行う大がかりなもので、数十人が参加している。これらの参加者は練子と称するが名前の明記はなく、女子供、または男何人と数で記されている。練物には音楽専門の地方はない。練子の内から唄、三味線を担当する形式で伴奏を受持ち、手踊、道化の所作を演じている。この時代、唄本、浄るり本はなく内容は不詳だが、姿形は相当立派なこしらえて、小道具を持ったり、大道具は作り物をかぶって歩くという凝った行列である。練子の中の主役は、やはり女子供であって、男は作り物の小道具を持つ後、縫いぐるみを着て鬼などになる端役、竹藪の作り物を頭からかぶって大道具の見立になる者などを担当している様うかがえる。

練物の特徴は、練り歩くことが主体であるが、芸能も演じている。そこで、踊台との違いを要約すると、(a)特定の専門家の地方が参加していない。(b)台本がない。(c)仮装して歩行するだけの人も加っている。(d)地方以外に男も参加して道化の所作をみせること、があげられる。

以上のように、天保5年の附祭は、数の上からも、内容・規模もさまざまで、自由に行われていた様子が、番附から想像される。

## (2) 天保の改革以降の附祭

天保13年以降となると、附祭の形式はだいぶ変わってくる。祭全体のダシの数は40から50でほとんど変わらないが、附祭の数は激減する。附祭の受持区域の町グループは3つときまってしまう、ダシの間に3ヶ所分散して配置されている。

(例) 天保13年、7番、27番、39番。

嘉永3年、12番、25番、35番。

万延元年、20番、30番、41番。

右の例のように、年によって附祭を受持つ町は変わるが、いずれも間隔を置いてダシの間に配列されている。請負う町は、ほとんど近辺の数町が集まった共同製作であるが、ときには一町でまかなわれる場合もある。

こうした附祭の形式は、幕末20年間、一定しており、各グループ毎の内容もほぼ共通した構成を保っていることに注目したい。〈資料 C・D〉

その構成は、1グループ毎に、練物、地走、踊台と3種類がワンセットになっている。資料(唄本)の中で、種類が不明のものもあるが、3演目が関連を持つ趣向で組合わされているので、ほかの年の例から同じ形式と類推できる。練物・地走・踊台の組合せは、1つの主題で関連性を持つ見立の内では各々の舞踊が行われている。

(例) 月雪花。天地人。三都。真草行など。隅田川風景の内。花尽し(菊・牡丹・あやめ)。12ヶ月の内正五九の見立

この組合せの方法は歌舞伎所作事の変化物の作り方と共通点があり、芸の内容も歌舞伎に準じたものであることは想像にかたくない。外題は請負の町名を織りこんで特別に作られているものもあり、また、〇〇の見立、〇〇の学びとだけのときもある。しかし、演者の役名や、唄本・浄るり本の内容から推察すると、歌舞伎所作事の「吉原雀」「吉野山」「お祭り」「汐汲」などの有名演目の焼直しであったことがうかがわれる。題名にも、役名にも、「〇〇の学び」とあることから、既成の歌舞伎題材をまねた形という心であったろう。(学びはまねびの意)。当時においては、大歌舞伎と同じようなことができる。見ることができるといことが興味の中心であったのだろう。

このように、練物・地走・踊台の3種類をひとまとめに関連づける形式は、天保13年にはみられないが、嘉永以降は定着しており、その年毎にいろいろの趣向でアレンジする工夫がみられる。1グループの附祭は、①練物②地走③踊台とおよそきまっているが、ときには①②が入れ替ることはあっても、③の踊台が殿であることにはかわりがない。

次に、各種類別にその特色をみでみる。前述したように、天保5年には、地走という形はなかった。また練物の内容も多少変化している。

①練物。基本的な形は天保5年の附祭と同じく歩きながら踊る行列として変りはない。天保5年との相違は、音楽の地方の連名があって芸人が参加していることと、浄るり本、唄本ができていことである。嘉永に入ると、さらに引台が加わり、途中から引台に上ってその上で所作をするということもみられる。地方は、「底抜け屋台」または「かつぎ日覆」といわれる人足のかつぎ枠だけの屋台に入って、歩きながら演奏する。練子といわれる踊り手たちはやはり女子供が中心である。男は女方の扮装をして道外の所作を演じたり、縫いぐるみで主役を引立てるカラミのような役にまわるのは以前と変りはない。主要な役には大きな日傘(差掛傘のようなもの)を差掛け、練り歩く組、手踊り所作をするグループとあって参加人数は多い。

時代が下るにつれて、ますます手が込んで、練物にも引抜きが行われている。練歩きながら引抜

くとはどういう風に行われたか興味があるが、詳しくはわからない。引抜きとなれば、当然後見が必要になる。嘉永3年の「附祭練子芸人名前帳」にも、番附にも、後見をしている者の住所氏名年齢まであきらかに記されている。これによると、引抜きがなくとも後見は使われている。全部ではないが、振付、作者も明記されている資料もあった。

②地走。語意の通り、地面を歩きながら芸をみせることである。地走の語は、吉原俄の番附にも「はやし連中・地走り」とあって、「引台」と区別して書かれている。吉原俄で使われた地走りは附祭の芸能の地走と同義語であると思われる。いずれも、屋台や引台の上でみせる芸能と区別して、歩きながら、または町の辻などで止り、地上で演ずる芸能と解すことはできよう。

歩きながら芸をみせる形態である地走は、練物とほとんど差異はない。しいて練物と地走の比較といえ、練物は仮装行列をして練り歩くことに主眼を置き、踊や道化の所作はそえものであると思われるのに対し、地走は手踊をみせることが中心であるようにみえる。それは、練物では練男、練女子供と記し、地走では地走踊女とあること、また練物に作り物や縫いぐるみの出てくるものが多く、男が道化を演じているのに対し、地走は女子供がほとんどを占め、揃いの姿で手踊を踊ることが記されていることからである。しかしながら、天保13年の番附では、以上の傾向が読みとれるが、時代が下って嘉永3年以降では両者の特色はほとんどなくなり違いがみとめられない。地走も練物と同様に多人数の編成となり、男も参加し、練歩く行列や途中で引台にも上って所作をみせるという形式の大がかりなものになってくる。しかも、天保5年の附祭では踊台にしかなかった引抜きが、地走でも、練物と同様に行われている。これは衣裳を下に着込んでいて、道を歩きながら引抜いたのであろうか。屋台はなく、底抜け日覆や岩組などの作り物があるところから、そのかげでも引抜き早替りしたものかと推察するほかはない。

③踊台。一 踊屋台とは書かれていない一 踊台の特徴は屋根つき屋台が1荷だけ出て、その台上で踊ることである。嘉永5年の錦絵や万延元年の番附および「附祭練子芸人名前帳」の記載によると、破風造りの三方に造花（青簾のこともあり）などをつけ、舞台の周囲三方に高欄がついた立派な舞台である。背面は囲ってあり、襖絵または演目に困んだ簡単な大道具になっている。「名前帳」には「踊台持人足式拾人」とあるところから、かついで道中したことがわかる。人が荷ったままでは、おそらく舞台が不安定であろう。そこで移動しては辻々に下ろし、とめて演技したと思う。天保11年改正の「神田祭巡行図」が残されてお

り、それには町のところどころに■印がつけられている。この場所で移動してとまり芸能を演じたのではないかと考えられる。

踊台は、2人がやっと踊れる程度の大きさらしく、練物・地走が多人数なのに比して、ほとんどが2人立、または1人立の踊である。踊台の傍に、唄・三味線は立姿で、囃子方などが底抜け屋台で囲った中に入っている絵から、地方の演奏形式は以前と同じである。踊の内容は、練物・地走より充実した演目で、長唄と浄りを同時に用い（掛合いか？）、段物の体裁をととのえている。役柄も固定して「頼兼・高尾」「定家・上臈」など、男女の組合せが大部分で、多くても3人どまりである。そして必ずといってよい程、時代の役柄から、世話の役柄に引抜き、変化していることが特徴といえる。「右・長唄・浄りにて所作仕候」と記されているように、単に手踊でなく所作仕候と劇的な内容のある踊一所作事であったことがうかがえる。

## 5. 練子・芸人の様相

さて、練物の練子、地走の踊子、踊台の踊子および地方の芸人を勤めたのは、どういう人たちであったろう。

その詳細は、嘉永3年・万延元年の「山王祭附祭練子芸人名前帳」2冊の資料によって、ほぼあきらかにすることができる。

音楽担当の長唄・浄り・囃子には、当時の高名な専門家も参加し、また芸名を持たない市井の娘たちも加っているが、ここでは、練子・踊子にしぼって調べてみる。

この「名前帳」には、参加者の住所・氏名が明記してあるほか、何某店何某の妻・仲・娘・姪というように続柄も記されている。むろん、江戸の庶民であるので、苗字はなく名前だけの記載だが、なかに苗字のあるのは、芸名と認められる（藤岡・坂東・中村など）。

一瞥してみると、実に広範囲の町の人々が参加している。花柳界の芸者ではない、一般の商家や職人たちと思われる人たちの子女たちだ。これまで、江戸の祭の芸人は主に芸者が演じた（『日本庶民生活史料集成』第22巻「江戸の祭」解説）といわれていたが、今回、前出の資料により、ほとんどが素人の娘たちであることが判明した。しかも踊子になる娘は、12、3歳から17、8歳までで15、6歳が圧倒的に多い。20歳を過ぎるとすでに年増で、後見にまわっている。10代の娘たちでも、芸名を持っているものも多く、当時、街に踊りを習う素人娘が非常に多くいたことが証明できた。

これら、踊子の娘たちの親は、どんな人たちであったのだろうか。職業の記載はないので、暮し向

きの内情まではわからないが、多分、相当に余裕のある家と思われる。附祭の規模の大きさからみても、金がかかったことは事実だ。それを町内で負担するとなれば、当然花形の主役を演ずる娘たちの親が、それ相応に分担したことであろう。財力のある家庭でなければできないことである。その証拠に、家主何某の娘、または家持の娘というように店借でない人たちの娘が、それなりに目立つ役をもらっているということが認められる。

嘉永3年山王祭の一部を書き抜くと、  
「鎌倉繁栄の学・富士裾野狩場対面」地走  
工藤 祐経 小石川金杉水屋町家持安五郎  
娘きやう事 坂東 鏡 18歳  
曾我 十郎 同所同町同人  
娘とよ事 坂東 豊八 17歳  
近江小藤太 同所同町同人  
姪こう事 坂東 三幸 18歳  
後見 同所同町同人  
妻みつ事 坂東三津江 42歳

後見を勤めている、家持安五郎妻が坂東三津江で踊師匠であったようで、娘2人と姪1人がこの演目の主要な役を占めている。家持であろうが、安五郎は大変な出費であったに違いない。同じく続いて、踊台「頼朝霊夢の学」には、出雲町茂吉店伊左衛門妻はる事、中村古はる40歳と娘きん16歳が後見を勤め、頼朝に娘はま事、中村浜次17歳が主演している。このほか、姉妹で踊子、後見をしているものもある。

以上の例からでは、飛躍するかもしれないが、踊師匠の発言力は結構強かったのではないかと考えられる。万延元年の資料にも、母親の踊師匠が後見で、娘が踊台の主役を勤めるとか、姉が踊師匠で後見、妹が踊子といったケースも多くある。また、嘉永3年に踊子18歳であったものが、万延元年に後見25歳（10年経過しているので実は28歳か）となって登場する中村浜次、同一人物であろうと思われる者もあった。

万延元年になると、家主ばかりでなく地借と書かれた人も増えてくる。地借とは土地を借りて家をたてた長屋の店借ではない人と思われる。幕末頃の古地図では、大名・武家・寺社の屋敷が江戸の大半を占め、町人たちは大部分が棟割長屋に人口密度の高い暮しをさせられていた筈である。しかし、わずか10年間の差だが、次第に町人の中でも自家を持てる力をつけてきたのであろう。それだけに取締があっても、附祭の内容は衰えをみせなかったのである。

## 6. 流派の存在および踊指南の状況

番附、名前帳に載っている振付・後見・踊子の内から、芸名と思われる名前を抜き出し、流派別

に統計をとってみた。さらに、その名前を、明治8年刊『諸芸人名様』踊指南之部の中に追跡した結果である。〈資料 E〉

『諸芸人名様』は、明治になって芸人として税金を納めた人の記録であるので、踊指南として生活をしていただた人であると認められる。すなわち、幕末の祭礼に活躍した人が維新の動乱を経て、明治8年まで踊師匠として生き残ったという証拠といえる。

附祭の資料では、天保5年から13年までは、苗字がなく芸名としては確認できなかった。しかし『日本庶民文化史料集成』記載の「見立番附」の中に芸名があり流派の存在が認められた。中には、名前から同一人かと思われる者もある。

「見立番附」では、天保年間から、妓女・狂言師と呼ばれて、踊師匠一舞踊専門家としての存在がクローズアップされている。

名取の人数上からのベスト5は、幕末も明治も変わらず、多少順位が入れかわるだけである。ここに掲げた14の流派はほとんど現在も存在しているが、勝見、巴、藤元の3流派は継承されていない。

勝見流は、現在同名があるが、坂東流の別派として紋所に由来して新しく作られたものである。山王祭の中では嘉永7年（安政元年）の本両替町、北鞘町の附祭の内、地走「紅葉狩の学」の振付・後見のみに名前があるだけで、ほかには登場せず消えている。

巴流は、万延元年の山王祭、翌文久元年の神田祭の2年間に、舞台・練物を受持つて、振付・後見・主演を一族が勤めているが、そのほかは見当らない。この時の踊子こま次（駒次）だけが明治の踊指南に残っていたが、現在は無い。

藤元流は、文久2年の山王祭だけに登場。その前年文久元年の見立番附『東部自慢花競』に「踊屋天狗、むやみにはやるぜ、藤本栄吉」とあるのと同一人であろうと思われる藤元栄喜智が振付を担当している。ほか、後見に3人、踊子に2人の名があるが、明治にはすでに消えてしまっている。

明治8年まで、生き残った30名について一人一人の動向を調査報告したいが、紙幅がないので、一部を例としてあげることにする。

トップの藤間では、歌舞伎振付師として活躍した二世藤間勘十郎が、天保年間の附祭振付に参加。嘉永年間になると亀三勘十郎とよばれた三世勘十郎が活躍している。この勘十郎は、歴代の三世には数えられず、のちに三世となったのは藤間よしである。藤間よしは嘉永元年、狂言師の番附にのり、同年山王祭には、後見大よしの名で唄本にみえる。

踊子など芸名の数の上では、中村、坂東が多い。坂東流からは、附祭に名前を連ね、明治になると「諸芸頭取世話方」となった坂東三津江・三津代

の2名がいる。

次いで、松賀流も長期にわたって附祭で活躍をしている。現五世家元宅にも4枚続きの錦絵をはじめ、初代の手といわれる“名披露目の迎文”などの資料が伝えられている。これらの資料と附祭における活躍状況を照合することにより、幕末の踊師匠の動向がより明確に把握できる。

ここでは、附祭を中心にした松賀流の動向をみよ。嘉永3年、山王祭には後見に松賀於藤・藤栄・幸藤・藤吉喜の名がみえるのを皮切りに、嘉永5年、嘉永7年(安政元年)万延元年の山王祭、文久元年の神田祭と続けて、振付・後見・踊子に多くの名取たちが活躍している。このほか、年代不明の山王祭(安政年間か文久2年と推定)の分まで含めると、幕末十数年間の祭礼にはほとんどが松賀流が顔をみせているのだ。明治の『諸芸人名録』には藤勝ほか4名だけが残っているが、現家元の資料からは、附祭に10代の踊子であった人たちが十数名も名取師匠として名を連ねていたことが判明した。

この中の1人松賀於藤(雄藤)の足跡を辿ってみよう。於藤と雄藤と音は同じなので呼び名として同一人としてみる。

嘉永3年、山王祭の後見に於藤の名がみえたのが28歳、嘉永7年に雄藤で振付を担当、文久2年の見立番附『三箇一対孤拳酒』の中で、「おとにまさりのおうで美人」と所作の名手に松賀於藤の名がのる。また、嘉永5年の山王祭に踊子として2代目松賀雄藤が登場し、万延元年山王祭、翌文久元年神田祭にも同名で踊子になっている。万延元年の時に18歳とあるところから嘉永5年の2代目初登場は10歳の年少であったと推察される。

一方、松賀流家元の過去帳をみると、

初世 松賀於藤 文政3年(1820)九月生  
明治19年(1886)11月27日歿 66歳

2世 松賀慈童 天保14年(1843)3月生  
明治19年9月4日歿 44歳 初世娘

この2つの資料から年齢を算出すると、多少のずれはあるが、附祭の資料の松賀於藤・雄藤は初世と2世の親娘であることが判明した。現松賀流では2世の名前を慈童と伝えているが、2代目雄藤の初登場が10歳とすると、生歿年が合致するので、雄藤と名乗った時期もあったことがわかる。

2世雄藤の初登場となった嘉永5年山王祭の「職鯉五月偶」の錦絵には、踊子姿の雄藤と家元もともに画かれている。しかし同演目の唄本には、振付松賀雄国とあり、そのほかの後見・踊子の名をつぶさに錦絵と照合すると、登場人物は全部合致するところから、家元の名が振付の雄国ではなかろうかと考えられる。『演劇大百科事典』の流派系図によると、初世家元の名は松賀雄勝とあり、生歿年月は合うが名前が違う。附祭には、雄勝と

いう名前は見当らず、雄がつくのは、雄藤と雄国の2つだけである。雄勝-雄藤の読み違いか、いずれにしても『演劇大百科事典』の系図は書きあらためなければならぬと思う。

### おわりに

江戸における祭礼の芸能として、主に山王祭附祭を中心に調べた結果をまとめてみる。

- (1) これまで祭礼の芸能(舞踊)の演者は芸者などの職業婦人であるとされていたが、一般庶民の娘、とくに10代の娘が花形であることが判明した。
- (2) 祭礼の芸能に出演できるのは千載一遇の機会であり、そのために舞踊の稽古にはげむ子女たちが多く、踊指南(舞踊教授)を専門とする師匠も相当の人数がいたと思われる。さらに、舞踊の流派が幕末において、14も存在していることがあきらかとなった。

これら踊指南の師匠たちは、明治維新という近代への大きな変革のなかで、たくましく生きぬいてきた。今日の日本舞踊が、古典を伝承し、各流派が繁栄してきたもの、こうした街の師匠たちの力によるものといえよう。

その背後には、江戸の祭の芸能が寄与していたと考えられる。

資料A 資料一覧表

年号	西暦	干支	祭礼名	資料			附祭の数			備考	
				番付	唄本	獅子芸人 名前帳	練物	地走	踊台		
天保3	1832	壬辰	山王祭		1						
	4	1833	癸巳								
	5	1834	甲午	山王祭	1			8	10		
~~~~~											
この間山王祭3回あり 資料ナシ											
天保13	1842	壬寅	山王祭	1	9		3	3	3		
	14	43	癸卯								
	弘化元	44	甲辰								
嘉永元	2	45	乙巳							山王祭、資料ナシ 附祭の種類不明 同上 同上	
	3	46	丙午	山王祭	1						
	4	47	丁未	水川祭	1						
	48	戊申	山王祭	9							
	2	49	己酉								
	3	1850	庚戌	山王祭	9	1		3	3		3
安政元	4	51	辛亥							松賀流家元所蔵の「錦絵」あり 『庶民生活資料』記載 同上 山王祭、資料ナシ 山王祭、資料ナシ	
	5	52	壬子	山王祭	9		3	3	3		
	6	53	癸丑								
	54	甲寅	山王祭	1	9		2	4	3		
	2	55	乙卯	神田祭	1						
	3	56	丙辰								
万延元	4	57	丁巳								
	5	58	戊午								
	6	59	己未								
	1860	庚申	山王祭	1	9	1	3	3	3		
	文久元	61	辛酉	神田祭	1	9		3	3		3
	2	62	壬戌	山王祭		3		1	1		1
年代不明			山王祭	6			1	1	1	唄本3種類不明、安政年間か? 同上	
			神田祭	1							
計				6	76	2					

## 資料B 天保5年(1834年)甲午

## 山王祭 附祭

## 番附

行列順	町名	種類	演目	役名	踊子	年齢	後見	振付	備考
7番	本町四丁分 岩附町 金吹町 本草屋町	踊台	三番叟の学 「三番叟日吉の幣」 (浄るり)	三番叟の形 後ニえちご獅子の学 千歳の形 後ニ引抜の姿にて	ぎん はな	18歳 15歳	やす きん	53歳 19歳	
8番	本両替丁 駿河丁 品川丁・同裏河岸 北鞘町	練物	玉取の学 「志波浦」	鎌足の形 龍人の形 獅子の形 海士の形	1人 10人				唄三味線に 合せ少し玉 取体
9番	本小田原町 瀬戸物町 伊勢町	踊台	義経卿君の学 「妹脊中花の今様」 (長うた)	義経の形 男形 卿君の形 女形	かな ゑい	15歳 14歳	女	1人	
10番	室町三丁分 本町三丁目裏河岸 安針町 本船町	踊台	五郎舞鶴の学 「岩盤石千歳草摺」 (長うた)	五郎 舞づる	たけ もん		女	2人	
11番	本石町四丁分 十軒店	踊台	頼政菖蒲前の学 踊長唄文句	頼政引抜 女の形(茶摘籠を持) あやめの前引抜 男の形(同上)	小徳 きく世	16歳 16歳	三津世 みね	19歳 17歳	(注) 男形→女形 女形→男形 に引抜
12番	西河岸町	練物	和藤内凱陣の学 猛虎退治	大木大刀を持人 竹の造り物をかむり 数の形にて歩行 和藤内の母の学 赤毛の木旗を持人 管弦の学び 和藤内(子供)	1人 20人 1人 2人 16人 1人				和藤内・日 覆れんだい に乗る。担 ぎ人足唐人 の形
22番	富沢町 長谷川町	練物	僧正坊牛若丸の学び	牛若丸 児 供奴 僧正坊 外ニ天狗	1人 1人 1人 1人 13人				天狗13人の 内、6人三 味線、笛、 太鼓
23番	銀座老丁目 二丁目 三丁目 四丁目	踊台	歳男豆蒔の学 (長うた)	男形 (侍ふし素袍) 女形 (打かけ鬼の面を持つ)	こと ぶし	16歳 15歳	やそ	18歳	
24番	通四丁分 呉服町 元大工町	踊台	三番叟学び人形 「舌出三番叟」	三番叟の人形 のちに娘の形 花笠をもつ 人形つかい	吉田 いは 西川 やす	25歳 18歳	吉田 冠三 黒子 吉田小五郎 (縫いぐるみ) 同 新五郎		(注) 三番叟は人 形
26番	本材木町老丁目 二丁目 三丁目 四丁目	踊台	業平小町の学	業平の形引抜 菊売頭に菊をのせた女形 小町の形引抜 仕丁の形はうきを持	ふん よし	13歳 13歳	かね	17歳	(注) 男形→女形 女形→男形 に引抜
27番	青物丁 萬丁 元四日市丁 左内町	造物	出雲八重垣の造り物	綱引	22人				(注) 練物か出し の一種か?
35番	竹川丁 出雲丁 芝口一丁目西側	踊台	傀儡師の学 「西宮睦月の遊」 (浄るり)	傀儡師	久良吉	16歳	扇芝	23歳	

36 番	弥左衛門町 新肴丁	練物	士農工商の学	士の学び 鬼の形(ぬいぐるみ) 男 3人 為朝の形 女子供1人 雑兵の形 男 2人 農の学び 農人の形 女子供2人 同 男 5人 工の学び 男(棟立道具を持) 3人 同 女子供4人 商の学び 海士の形 女子供1人 商の男 3人 人形つかい 男 4人				農の学び農人女子供2人は賤の女と賤の童・男5人は笛・すり鉦・手太鼓・三味線・おどり道化所作仕候(後略)
37 番	本材木町八丁目 具足丁 柳丁 水谷丁	練物	頼義・奥女中 桜符の学	桜の造り物持 男1人 女子供 4人 内 2人 桜の枝に盃 内 2人 花槍を持 桜の造り物を花台にのせ持 2人 女子供(三味線音曲) 4人 縫いぐるみ神馬 男2人 同 猿の形 2人 管絃の学び 女子供5人 大拍子太鼓を持人 4人				縫いぐるみの猿の形・えぼし白丁にて道化所作仕候
38 番	南鍋町 山下町	踊台	矢の根五郎の学 (長うた)	踊り子 哥采次 15歳	哥 仙 ひ で			
39 番	数寄屋町	踊台	高砂丹前の学 (長うた)	女形 ふり袖 よ し 14歳 ふ じ 15歳	ら く 18歳			
40 番	南永坂一丁目 同 二丁目 霊岸嶋塩丁 同 四日市丁 箱崎一丁目 箱崎丁小新橋丁 大川端丁	練物	豊作出来秋の学	百姓の形 男2人 老婆の形 男1人 子もり女の形 男1人 庄屋の形 男1人 神主の形 男1人 百姓老人の形 男1人 同 稚子の形 男1人 同 医師の形 男1人 替女の形 男1人 田舎娘の形 三味線を持 女子供1人				右人数にて豊作踊の道化所作仕候
44 番	常盤丁	練物	安宅関の学	のほり 男2人 男子供 7人 (草刈童の形 草刈籠を負い熊手を持 男1人 弁慶の形 (笈を負い笠かぶり 金剛杖をつく				松・扇の造り物を男3人に道化所作仕候

(注) 出し(山車)は45番まで

以上

## 資料C 天保13年(1842年)壬寅

## 山王祭 附祭

## 番附

行列順	町名	種類	演目	役名	踊子	年令	後見	振付	備考
7番の1	本丁四丁分 岩附丁 金吹丁 本革屋丁	練物	七福神の学び 「七福神宝入船」 (練物男7人)	羊の形 鯛の形 鶴の形 唐子の形 白蛇の形 鹿の形 虎の形	金次郎 常三郎 富蔵 熊蔵 清次郎 玉助 秋太郎				木綿縫いぐるみ、または造り物を冠る。道化所作仕候
7番の2	同上	地走	田植の学び 「富饒年正税収納」 ほうねんたづきのくらいり (地走踊子供5人)	早乙女 同 同 同 同 百姓男 (茶色の石持、鍬を持)	なか こう こと かつ きく 栄蔵 新治	16歳 16歳 16歳 16歳 15歳			底抜屋台一荷 まわり三方 揚障子あやめの造花
7番の3	同上	踊台	羽衣の学び 「寛政羽衣東舞彩」 ばしゅういとぶのさかえ	郎之形 後二猫人の形 天人の形 後二田舎娘	うた とみ	13歳 12歳	女 2人		右兩人にて狐釣の所作仕候
27番の1	元四日市丁 萬丁 青物丁 佐内丁	練物	昔噺の学 (女練子供4人)	桃太郎の形 雉子 猿 犬 鬼の形	ふみ たね とら とせ 男	13歳 15歳 14歳 16歳 13人			青鬼太鼓、赤鬼は三味線。… とうけ踊仕
27番の2	元四日市丁はか 同上	地走	五節句の学 「姦花五色彩」 わがやのなごしきのいろどり	正月之学 (松の枝に短冊) 三月之学 (手籠に蛤、桜の枝) 五月之学 (手桶にあやめ) 七月之学 (笹へ短冊、おだまき) 九月之学 (菊の枝)	いと きく はま きん	15歳 16歳 15歳 15歳			(注) 踊子→1人 名前不明 各々始終長唄にて所作仕候
27番の3	同上	踊台	傾城・奴の学 「今様姿写絵」 (女踊子供3人)	傾城の形 奴の形 禿の形	その たか かね	16歳 13歳 10歳			富本浄るりにて所作仕候
39番の1	数寄屋町	地走	景清の学 (地走り踊 子供5人)	景清の形 雑兵の形 " " " " " "	きん くら まつ すみ たけ	16歳 18歳 17歳 17歳 18歳			何れも長唄にて踊申候
39番の2	同上	練物	五穀成就祝ひの学 「五穀成就宝入船」 (練物男7人)	庄屋の形 子もりの形 医師の形 田舎女の形 百姓の形 女馬士の形 草刈童の形	吉五郎 由次郎 富五郎 梅次郎 平次郎 七三郎 寅吉			右7人何れも清元浄るり道化所作仕候	

30番の 3	数寄屋町	踊台	朝比奈虎の学 「朝日影霞隈取」 (女子供2人)	大磯の虎の形 (白狐の面を持) 朝比奈の形 (釣りの輪並に亀の面、幣を持)	ひろ 14歳 たい 15歳	みよ 21歳		底抜日覆一 荷・荷い茶 屋・踊台人 足61人
-----------	------	----	-------------------------------	------------------------------------------------	------------------	--------	--	---------------------------------

(注) 出し(山車)は45番まで

以上

資料D 万延元年(1860年)庚申

山王祭 附祭

番附・唄本・名前帳

行列順	町名	種類	演目	役名	踊子	年令	後見	振付	備考
20番の 1	難波町 高砂町	練物	花叢し菊の見立 「夜宮噂菊嬉」 よみやのうわさきくもうれしき (浄瑠璃)	鬼一の学び ひめの学び こしもの学び 牛若の学び 喜三太の学び	つき はな きく ひかん たい	17歳 16歳 16歳 17歳 16歳	藤間 三津 32歳 藤間 せん 19歳 藤間 巴光 31歳 藤間 美加 18歳	藤間 三津 後見 兼 (作者) 梅沢 宗六	右女子供何 れも手踊仕 候
20番の 2	同上	地走	花叢し牡丹の見立 「扇牡丹開皆」 あふぎぼたんひらくひとむれ (浄瑠璃)	景清の学び 引抜石橋 重忠の学び 引抜石橋 人丸の学び 引抜女軍兵 海士、同所 同 同 同	坂東 こう 岩井 象八 廣川 ミチ 中村 ゑつ 岩井 たま 岩井小しげ 松賀 まつ 岩井小しづ	17歳 16歳 15歳 17歳 18歳 18歳 15歳 18歳	岩井 象次 吾妻 藤八 中村 兼吉	廣川 男女太郎 (作者) 梅沢 宗六	岩組に牡丹 の造物並石 橋の造物後 二傍置申候 (注) 藤間三津の 娘がひかん
20番の 3	住吉町 同 裏河岸 難波町裏河岸	踊台	花叢あやめの見立 「艶菖蒲人形」 ゆるしのいろあやめにんぎょう	頼政の学び 引抜とも水売男 あやめの前学び 引抜ともはたる売女	まん つる	17歳 17歳	松本 はつ	廣川 男女太郎	(注) 松本はつの 娘がつる
30番の 1	平松町 新右衛町 樽正町 川瀬石町 南油町 小松町 音羽町	練物	三都の学び 東都の見立	漁師竹成 漁師政成 漁師友成 引抜となり魚うり けいこ娘 やつし男 兒子引抜芸子 田舎娘引抜茶屋女 機織女引抜山帰り	藤間 つね 藤間 らく 藤間 かめ 西川 なを 藤間 うめ 藤間 たね	17歳 16歳 16歳 17歳 16歳 17歳	藤間 大奴 28歳 藤間 小梅 21歳 藤間 小熊 28歳 清元 きん 25歳		浄瑠璃にて 手踊仕候 黒単物同頭 巾冠・後見 男志入
30番の 2	同上	地走	三都の学び 大阪の見立	恵比寿の学び 神楽師の学び 神子の学び 女胡蝶の学び 男胡蝶の学び 女胡蝶の学び 右6人天保山砂持之学びと相成引抜内3人は 男の形、内3人は女の形浄瑠璃にて手踊仕候	松賀藤ミネ 松賀 藤常 水木哥と茂 松賀 藤玉 松賀 雄藤 松賀 藤吉	17歳 18歳 17歳 17歳 18歳 20歳	西川 きん 30歳 西川 せい 19歳		(注) 面をつけて 踊り上衣を とって引抜 したらしい 右長唄浄瑠 璃にて所作 仕候
30番の 3	同上	踊台	三都の学び 京都の見立	定家卿の学び 引抜衛士之形 御所女の学び 引抜小原女之形	巴美代 巴安治	17歳 17歳	巴 栄 32歳 巴 悦 16歳		

